

5 大遺跡の考古遺物調査

丸井雅子

はじめに

2000年12月、約3週間をかけて、ベーン・ミアリア(=ベン・メリア)遺跡、コーケー遺跡、ソムボー・プレイ・クック(=サンボール・プレイ・クック)遺跡、コムボン・スヴァーイの大プリア・カーン(=プリア・カーン)遺跡そしてバンテアイ・チュマー(=バンテアイ・チュマー)遺跡を踏査した。この踏査にあたり、考古班は次のような目標を設定した。第一に、各遺跡の現状把握および平面的な分布調査である。これには、遺跡周囲の交通網(すなわち「王道」と考えられるもの)の痕跡を探ることも含まれる。第二に、考古遺物散布状況の観察である。以下、踏査の日程順に、ベーン・ミアリア遺跡、コーケー遺跡、そして大プリア・カーン遺跡、について所見を簡単に記述する。なお、考古班踏査参加者は以下の通りである：

Som Visoth, Lam Sopheak, Loeng Ravatthey, Nuon Mony, Tin Tina (いずれも、上智大学アンコール研修所常駐考古スタッフ・研修生)

1. ベーン・ミアリア(=ベン・メリア)遺跡

ベーン・ミアリアとは、クメール語で「黒檀の一種である木(=ベーン)」で作った「冠(=ミアリア)」を意味する。なお、現在用いられている遺跡名は、建造当初からのものではなく、後世の呼称であることを断っておく。これは、本稿で挙げる他の4つの遺跡についても全て同じである。

ベーン・ミアリア遺跡は、アンコール・ワットから東へ約60キロの所に位置する。また、この遺跡からさらに東へ約80キロすすむと、コムボン・スヴァーイの大プリア・カーン遺跡に到達する。ベーン・ミアリア遺跡と大プリア・カーン遺跡との間には、「王道」と推定される古代の道が通じており、それを裏付ける証拠としてラテライト製の橋の存在がかねてより指摘されてきた。中でもチクレン川に架かるスピアン・ター・オーン(Spean Ta Ong：ター・オーン橋)は、規模が大きく、一部損壊は激しいものの現在でも集落の人々が行き来する橋として機能している。この橋の欄干には、先端にナーガが据えつけられている。ナーガの腹部分には、仏陀の彫刻が残存し、様式的に興味深い。ちなみに、スピアン・ター・オーンはベーン・ミアリア遺跡からは約30キロ離れている。橋を往来する人へ「この道はどこへ通じるのですか」と東を指して尋ねたところ、「ベーン・ミアリアだ」という返事であった。

さて、この遺跡は、プノム・クーレン(=クーレン丘陵)の東南麓にある。プノム・クーレンは、アンコール地域に最も近い距離にある砂岩採石地であり、ベーン・ミアリア遺跡東側の砂岩が露呈した地帯において、現在もなお採石が行われている。この採石場一帯は土地の人々から、オー・ミ

アリアあるいは、オー・トゥモー・ダップと呼ばれており、その意味は「石 (= トゥモー)」を「叩く (= ダップ)」「小川 (= オー)」となる。

ベーン・ミアリア遺跡の東側には、東西約1.55キロ、南北約0.8キロの貯水池がある。この貯水池は、土地の人からは、ヴィアル・ハツタイあるいはヴィアル・プテイと呼ばれている。ヴィアル・ハツタイとは、「運動・格闘技をする (= ハツタイ)」「野原 (= ヴィアル)」という意になる。土地の人にはこの大きな土地（貯水池の囲いの中）が、水を貯えるものだったという認識が無かった故に付けられた呼称である。当然であるが、現在この貯水池は機能していない。貯水池の東南角には、プラサート・コーン・プルックという名の祠堂がある。この祠堂の名前は、このあたりで水（実は象の排尿）を飲んだ女性が身ごもり、産まれた子供に由来している。また、この象と子供の伝承は、遠くコーケー遺跡にまで行き着き、伝承が生まれた背景として、この2つの遺跡（ベーン・ミアリア遺跡とコーケー遺跡）が何らかの関係を持っていたことが類推されるのである。

2. コーケー遺跡

コーケー遺跡における踏査で特筆すべき点は、表面採集品として大量の瓦を観察したことであった。コーケー遺跡の概要については、既にアンリ・パルマンティエによって平面図などが紹介されている。パルマンティエは、コーケー遺跡内の砂岩製建物は、石を積んだ屋根構造を持たずに、木を組み瓦を葺いていたことを示唆している。我々はこの図面をもとに踏査を進めた。

ピラミッド型重層構造をもつプラサート・トムトムの東側に、祠堂群が形成されている。この祠堂群は、ラテライトを積んだ外周壁および2つの内周壁をもつ。中央から見て行くと、第1周壁の内側には煉瓦を積んだ小型の塔が密集して建てられている。その外側、即ち第1周壁と第2周壁との間には、第2周壁に沿うような形で、砂岩製長方形の建物が建てられている。我々が瓦を観察したのは、この長方形建物の内部である。土砂の堆積が著しいために表面を観察した程度であったにもかかわらず、瓦片は容易に観察できた。

さらに、第2周壁から東へ出て環濠を渡り、第1周壁（即ち外周壁）を抜ける。その外周壁の東塔門正面に、南北対に位置する長方形の砂岩製建物、および十字型砂岩製建物がある。この建物内部でも、我々は瓦片を大量に観察した。観察、採集した瓦片は、丸と平の2種類あった。一部、隅を焼成前に角をつけて欠いたものが見つかっている。丸と平の瓦以外、つまり道具瓦（軒先瓦の瓦当部分、棟飾り、など）は採集できなかった。瓦については、コーケー遺跡群の他の遺跡（プラサート・ドムレイなど）においても表面で観察しており、瓦が葺かれた建物がいかに多く存在していたかが明らかである。

3. 大ブリヤ・カーン

この大ブリヤ・カーンでも、多くの考古遺物を表面に観察することができた。特に、次の2点について述べたい。まず1点目は、中央祠堂群である。計3つの周壁によって囲まれており、外周壁である第3周壁はその外側に約0.4km×0.6kmの環濠をもつ。環濠には東西南北それぞれに参道がかかっている。その第3周壁と第2周壁との間には、小さな窪地が無数にあり、そこには水が溜ま

っている。さて、この区域一帯において、観察したものは、焼き締め的大型甕片、褐釉壺片、などである。ダルマサーラを過ぎると、中央祠堂へ通じる軸線上にラテライト製のアプローチが築かれている。このアプローチの周辺にも瓦は実に多く散布していた。第2周壁内部では、遺物の散布を観察する事は出来なかった。

2点目は、中央祠堂群の北東に位置する大貯水池である。貯水池の中央には、プリヤ・トゥコールと名付けられた祠堂が建てられている。このプリヤ・トゥコールを挟んだ南北それぞれの貯水池堤上に、遺物集積地が認められた。堤上には、石像などを奉ったと考えられる台座が残存し、ている。そして、丸や平といった瓦の他に、蓮弁紋様が刻まれた瓦当部分や、棟飾りなども採集した。これらは安置された石像を覆う屋根構造の部材だった可能性が高い。

大貯水池は、大プリヤ・カーン遺跡の建造過程の中でも最終段階に入った12世紀末以後に、築造されたと考えられている。この考えに拠るならば、上記の遺物はかなり時期を限定することが出来るものである。

また、大プリヤ・カーン遺跡中央祠堂群の西側においては、小規模なラテライト製の橋を認めた。しかし、損壊および土砂の堆積が激しく、十分には全容を把握できなかった。現在の水路はかなり北西へ移動しており、雨季であってもこの橋には水が流れないそうである。そこからさらに西へ踏査を進め、プラサート・オー・チュートアルへ向った。この祠堂においても、瓦片を観察している。プラサート・オー・チュートアルの北側にて1~2 mの比高差をもつ土手状の地形が認識できた。樹木に覆われていたが、それは道でありシェムリアップ（アンコール地域）へ通じる道であると、同行の警官が教えてくれた。

4. 小結

今回の踏査は、班員の大半が未踏査の遺跡ばかりだったので、まず平面図を片手に現状を把握することが重要な作業となった。その過程で、ある程度予測をつけながら、地表面に散布している遺物（特に瓦類）の観察につとめた。

成果として挙げる事が出来るのは、コーケー遺跡においてバルマンティエが瓦屋根を推測していた箇所、実際に瓦を観察・採集したことであろう。個々の破片に対する分析と、他の遺跡との比較はこれからの作業に委ねられるが、時期あるいは地域差というものが導き出されるのか否か、関心をもたれるところである。